

# ルネ・ジラルールにおける模倣 (ミメーシス) 的欲望論とキリスト教

松 平 功

1. はじめに
  
2. 模倣（ミメーシス）的欲望論の展開
  - 2.1 三角的欲望論
  - 2.2 欲望の相互的媒介
  
3. 模倣（ミメーシス）的欲望論を土台とした供犠論の展開
  - 3.1 差異の消失による暴力の発生
  - 3.2 スケープゴート論
  - 3.3 満場一致の暴力
  - 3.4 文化と神々の誕生
  
4. ルネ・ジラルールによるキリスト教における模倣（ミメーシス）  
的欲望論の展開
  - 4.1 一神教と脱供犠化
  - 4.2 完成された啓示としての福音書 — 全人類への啓示
  - 4.3 サタンとスカンダロン

---

キーワード：模倣（ミメーシス）的欲望論, スケープゴート論, 供犠論, ルネ・ジラルール, 贖罪論

- 4.4 神の国
- 4.5 人類で初めての脱供犠化と贖罪論の否定
- 4.6 受難と神話の比較
- 4.7 神の国の時の啓示

## 5. まとめ

### 1. はじめに

本稿の目的は二つある。その第一は、模倣（ミメーシス）的欲望論を基礎に構築されているルネ・ジラルルの供犠理解やスケープゴート論といった社会的循環システムを考察し、その論議から導かれる宗教や文化の起源について仮説を吟味すること。第二には、模倣（ミメーシス）的欲望論とキリスト教の関係性、特にイエスの受難がどのような方法で、あるいはどのような意味において、ジラルルの上記仮説における関係性を生み出しているのかを検証することにある。

1961年に発刊された代表作の『欲望の現象学』（邦訳1971年）をはじめとして、ジラルルの業績は1972年発刊の『暴力と聖なるもの』（邦訳1982年）、1978年発刊の『世の始めから隠されていること』（邦訳1984年）、1982年発刊の『身代わりの山羊』（邦訳1985年）等々、膨大な著作数がある。そして、それらの著述で模倣（ミメーシス）的欲望論を中心として議論されている論目は民俗学、構造主義人類学、宗教社会学、社会心理学、比較文学、政治学、文明論、神学、聖書学と多岐にわたる。しかし、ここではそれらの論題を整理集約して模倣（ミメーシス）的欲望論から展開されている文化や宗教の起源とキリスト教に的を絞り、ジラルルの理論を解説しその検証を進めていく。

## 2. 模倣（ミメーシス）的欲望論の展開

### 2.1 三角的欲望論

ジラルールの模倣（ミメーシス）的欲望論は、その名称が示している通り、人間の欲望が他者の模倣であるという仮定から始められる。そして、その根幹には、三角形的欲望という概念が存在する。欲望とは一般的に、欲望する主体と欲望される対象といった直線的な構図を思い浮かべられるだろう。しかし、ジラルールは一見、直線的にしか見えない欲望にはその主体と対象に光を照射して、模倣的欲望を引き起こす媒介が存在するというのである。ジラルールにとって直線的な欲望とは、チーズの塊やワインを欲しがったりするような「欲求」のことであって、それらは自発的なものである。一方、欲望とは自分自身の心の奥底から自発的に引き出してくるものではなく、他者から借用してくるものである。つまり、他者が主体に対して模倣する欲望を媒介するのだという。そして、その関係性は、欲望する主体と欲望を引き出す媒介、そして欲望の対象という三角形の図式となる。これをジラルールは「三角形的欲望」と表現するのである<sup>1)</sup>。

また、彼はこの三角形的欲望の媒介を二種類に分類する。この分類は、欲望する主体と欲望を媒介する両者間の精神的または物理的な距離によって、主体と媒介の関係性に違いが生じることによるものである。第一のそれをジラルールは、「外的媒介」と呼ぶ。これは主体者と媒介者の欲望が重複せず、競合関係を生じない場合に当てはめられる。この外的媒介の説明に、ジラルールは『ドン・キホーテ』を例に挙げ、ドン・キホーテの欲望の媒介は騎士道小説の登場人物である主人公アマディース・デ・ガウラであって、アマディースが欲するのと同じ欲望をドン・キホーテが欲したとしても、主体が媒介と接する可能性は皆無であり両者に競合は生じ得ない。その点において主体は媒介に敵対することなくむしろ、敬仰する。つまり、外的媒介が精神的または物理的に遠

---

1) ルネ・ジラルール『欲望の現象学—文学の虚偽と真実』（古田幸男訳、1971）、法政大学出版局、pp. 1-5。

すぎるため、欲望による主体と媒体との確執や衝突の競合関係を生じること  
は決してない<sup>2)</sup>。

分類の第二をジラールは「内的媒介」と呼び、主な関心をこの媒介に向け  
ている。内的媒介とは外的媒介と違い、主体と媒介の精神的または物理的な  
距離が近接する状況にあり、それが両者の競合の誘因となるのである。例えば、  
模倣の手近な手本が媒介によって所有される場合、媒介者自身が欲望達成の  
妨げになり、主体者にとってライバルとなり憎悪と恨みの対象となる。また、  
模倣する主体にとって媒介者はライバルであるだけではなく、主体の欲望を  
妨げる障害となる。つまり、媒介は主体にとって手本「モデル」ではあるが、  
それと同時に対抗者「モデル＝ライバル」となり、かつ邪魔者「モデル＝オ  
ブスタクル」となるのである。そして心理的に媒介は主体にとって憧れであり  
手本「モデル」でもあるのだが、憎悪の対象となるという、崇拜と恨みの入り  
混じったアンビバレントな感情を持つことになる<sup>3)</sup>。

## 2.2 欲望の相互的媒介

また、主体が媒介者を模倣するわけだが、場合によっては媒介者も同時に  
主体を模倣する可能性も存在する。ジラールは「主体と媒体という二つの対  
抗者がそれぞれ中央に位置する二つの可能圏を重ね合わせることになる、…  
これらのライバル同士がお互いにたいして感ずる敵意（ルサンチマン）は、ま

---

2) 同上, pp. 6-10。ジラールは「媒体と主体がそれぞれその中央に位置する二つ  
の願望可能圏が、互いに触れ合うことのないほどに十分離れている場合、われわれ  
は外的媒介と呼ぶ…。この距離が縮小して、それぞれの圏が多かれ少なかれ一  
方の領域に重なり合う場合を内的媒介と呼ぶ…。媒体と欲望する主体との間のへ  
だたりを測る物差が物理的な空間ではない…。地理的な遠さがその要素の一つに  
なり得るとはいえ、媒体と主体とのへだたりは何よりも精神的なものである」と  
説明している。

3) 同上, pp. 11-16。

すますます大きくなってとどまることがない<sup>4)</sup>と述べ「対立感情の共存」を指摘している。そして、この関係性をジラルールは、模倣の「二重の媒介」あるいは「相互的媒介」と呼び、その人間関係における欲望の模倣が羨望、嫉妬、憎悪、対抗意識といった否定的な感情を起こさせる原因であると指摘する。このような相互媒介における対立感情の共存の中にあって、対抗と競合は激しさを増すことになるが、対立を引き起こす「欲望においては、形而上的なものの役割が大きくなるにつれて、形而下的なものの役割が減少する。媒体が接近すればするほど、情念は激しいものとなり、対象は具体的な価値をなくしてゆく」と推考する。相互にかつ二重に媒介された欲望がライバル心を燃やし合う大きな刺激となり欲望だけが膨らむのに対して、欲望の対象自体に関する価値については大きな意味を持たなくなり、最終的にその欲望の対象は実体をなくしてしまうのである。そういう意味でジラルールは、この欲望を「形而上的欲望」と呼んでいる<sup>5)</sup>。そして、二重の媒介が引き起こす「形而上的欲望」の論理を展開し、それによる際限のない虚しい敵対のメカニズムを以下のように著わしている。

形而上的欲望は常に伝染する。媒体が主人公に接近すればするだけ、それだけいっそう伝染しやすくなる。伝染と接近は、実のところ、同じ一つの現象を構成するだけだ。人がペストやコレラに罹るように、汚染された主体と単に接触しただけでそうした近くにある欲望に《とりつかれる》時、そこには内的媒介関係があるのだ。…内的媒介の世界においては、感染はきわめて一般的であるから、いかなる個人も、自分が今演じている役割を理解することなく、自分の隣人の媒体となることもあり得る。それと知らずに媒体となっているその個人も、恐らくは彼自身、自発的に欲望することはできないのだ。それ故、

---

4) 同上, p. 44。

5) 同上, p. 95, 107。

彼は、自分自身の欲望の模写をさらに模写したい気になるであろう。恐らくは最初彼の中では単なる気まぐれでしかなかったものが、激烈な情熱に変わってゆこうとするのである。どんな欲望も、それが共有されているのを見ればなおさら激しくなる、…同じ大きさで逆向きの二つの三角形は、この時、互いに重なり合おうとする。欲望は二人のライバルの間で次第次第に急速に、ちょうど充電中のバッテリーにおける電流のように、その往復ごとに強さを増しながら循環する…それぞれが、自分自身の欲望の優先権と先在権を主張しながらも、他者を模倣するのだ。それぞれは他方のなかに、恐ろしく残酷な迫害者を見る。…両者は互いに、相手と自分の間が、測り知れない深淵によってへだてられていると信じているが、どちらに関してもそう信ずることがまちがいだと誰も言うことはできない。これこそ、正反対なものの不毛な対立であって、二つの主体が互いに接近し、彼らの欲望が強くなるにつれて、ますます堪え難く、ますます無意味になってゆく対立である<sup>6)</sup>。

この相互媒介的な欲望を思料すると日本文学に馴染みのある者であれば、大凡の心に思い浮かぶのが、夏目漱石の『ころも』であろう<sup>7)</sup>。そのストーリーの中で登場人物である「先生」は、その友人「K」が自分の下宿先の「お嬢さん」を恋慕していることを知る。「先生」は友人「K」の欲望を模倣して激しく妬み敵対意識を開花させ、「K」を出し抜いて「お嬢さん」を略奪するが、そのことが原因で友人「K」は自殺してしまう。その後「お嬢さん」と「先生」

6) 同上, pp. 110-111。

7) 西永良成『〈個人〉の行方—ルネ・ジラルドと現代社会』(2002年, 大修館書店), pp. 30-31。文学者西永もジラルドの「相互媒介的の欲望」について、夏目漱石の『ころも』を例として説明している。また彼は、パヴェル・パヴロヴィッチの『永遠の良人』も自分の欲望対象をライバルに承認してもらわなければ何も欲望できないという、典型的な事例としてあげている。

は結婚するが「先生」の「お嬢さん」への愛は沈静してしまう。何故なら「お嬢さん」に対する愛情は友人「K」の欲望を模倣したもので、それは単に「形而上的欲望」でしかなかったのである。そのため相互に模倣された欲望の対象であった「お嬢さん」は、欲望を達成した「先生」にとって、その価値も意味も消滅したのである。ジラルールの「欲望する主体は、対象を自分のものとした時ただ空虚をにぎりしめるだけだ」という言葉の通りである<sup>8)</sup>。

二重の媒介が引き起こす欲望による幸福など存在するわけではなく、ジラルールはそのような欲望が引き起こす破局や地獄といった終焉の事例を、スタンダール、ドストエフスキー、ブルーストなどの著名な小説からいくつも炙り出して見せる。そして、相互の媒介で引き起こされる破局は、物質的な財というような具体的な対象を欲望するよりも、その対象が媒介者の聖性や名誉であったりするような抽象的なものである場合、より致命的なものになる。その得難さのため媒体によって主体におよぼされる魅惑の度合いが、とどまりを無くすからである。抽象的欲望の場合、主体はそれを「所有することによって、自己の存在の根源的な変貌を期待」する。欲望する主体は、自分の媒体そのものになりたいと望み、媒体の存在を呑みつくし同化することを希求し、他者の実態の中に溶解して媒体と自分自身との完全な総合を想像するのである<sup>9)</sup>。しかし、その不可能性のゆえに主体が媒介者をより一層に羨望し敵対し、それが相互的媒介であれば双方向的な憎悪と対抗の連鎖が繰り返されていくことになる。

この模倣（ミメシス）的欲望は「その欲望の犠牲者を次第次第に地獄のような地域にひきずってゆく」と、ジラルールは語る。また、その地獄は特定の個人間で相互に媒介し合う欲望の主体同士だけではなく、周りの他者へ、そして共同体へと伝播していく。何故なら欲望の相互的媒介は、欲望の持つ強力な伝染力によって、最初は二人だけに誘発されたものが、「相互的媒介が、

---

8) ジラルール『欲望の現象学—文学の虚偽と真実』, p. 183.

9) 同上, pp. 59-63.

二倍だったものから、三倍、四倍と何倍にもなって、「その数は無限に増大し得る」からである。これらの「相互媒介は遂には集団全体に作用するにいたる」とジラールは主張するのである<sup>10)</sup>。以上が、ジラルールの模倣（ミメーシス）的欲望論についての概要である。次に、その欲望論を土台としたスケープゴート論と供犠論の関係性の考究を試みたい。

### 3. 模倣（ミメーシス）的欲望論を土台とした供犠論の展開

#### 3.1 差異の消失による暴力の発生

模倣（ミメーシス）的欲望は、「人間の欲望を他人の欲望の模写とすることによって、必然的に、敵対関係に通じていく。こうした必然性が今度は、他者の暴力の上にその欲望を固定する」のである<sup>11)</sup>。そして、相互的媒介によって欲望の模倣は、伝染し合い拡散し、とどまることを知らない。他者が他者を媒介し欲望を模倣するという連鎖は、自分が他者になりたいという不合理で形而上的欲望であるにも関わらず、主体はそのことに気づくこともなく欲望の奴隷と化すのである。また、欲望に魅せられた人間は、その一方だけを熱望するというわけではなく、同時に他方も熱望し得る。つまり、お互いがお互いを模倣し合うだけではなく、その模倣する対象はひとりの他者に限られるわけでもなく複数の他者にもなり得るのである。これをジラールは「人間はお互いにとって神となる」と明諭する。混沌とした模倣の競争は激化しながら連鎖し、「媒体が接近すればするほど、形而上的欲望に結びついた現象は、それだけ一層集団的性格を帯びる」のである。何故なら「人間間の差異が次第次第に縮小消滅しつつあるこの世界では、内的媒介が支配的になっているからである。」<sup>12)</sup>

ジラールは、社会の「秩序と平和と豊饒は、文化的なさまざまな差異に依

---

10) 同上, p. 116。

11) ルネ・ジラール『暴力と聖なるもの』（古田幸男訳, 1982）, 法政大学出版社, p. 267。

12) ジラール『欲望の現象学—文学の虚偽と真実』, pp. 15, 309。

扱っている」と断言し、以下のようにそのような差異の存在意義と、その消失による相互的暴力の関係性を明確に述べている。

人間の企てにおける、位階（Degree）、つまり「差異」の役割についての全般的考察…。「位階」、ラテン語のグラデゥス gradus〔立場、階級、地位〕は、自然的で文化的な一切の秩序に属する原理である。人間を社会の中で、それぞれの関係に応じて位置づけるものはそれであり、事物が、組織され位階づけられた全体の中で一つの意味を持つようにさせているのもそれである。人間が変形し、交換し、取扱うさまざまな物や価値を組織立てているものもそれである。弦楽器の隠喩を用いれば、この秩序は、言葉の現代的意味における構造として定義される。それは、相互的暴力が共同体の中に座を占めれば一瞬にして調子を乱してしまう差異的へだたりの体系である。危機は、ある時は差異のぐらつきとして示され、ある時は差異の骨抜きとして示される<sup>13)</sup>。

差異とは自己を他者と区別するための階級であったり地位であったり、または家柄であったりと様々な違いによって、自己を表現するためのアイデンティティでもある。しかし、これを人間同士の上下関係や存在の重要度を区別するものとして用いるようなことは、現代社会においては、少なくとも公共の場ではまずあり得ないだろう。現代人は、「平等」という価値基準を掲げて非差異化を叫ぶのである。それは、人間を区別するだけではなく差別の根源となる差異というものを、ある意味暴力的な因子として捉えているからである。しかし、ジラルールは逆にそういった差異の消失が暴力を引き起こすと考えるのである<sup>14)</sup>。そして、むしろ差異の消失が「文化的秩序の全体的な危機として定

---

13) ジラルール『暴力と聖なるもの』, p. 82。

14) 同上, p. 81。ジラルールは「同一の家族あるいは同一の社会の人間同士の間に、気違いじみた敵対関係、無制限な争いをひきおこすのは、差異ではなくて差異\

義されるべきである」と主張する。何故なら、「文化的秩序は、さまざまな差異の組織化された体系以外の何物でもない。つまりそれは個人個人にそれぞれの《それがそれである特質》を与え、それぞれに他の人々との関係において位置すべき所を与える差異的へだたりにほかならない」からである。また、「ある種の自然的差異がなくなるということは、人間たちがそれぞれその中に配分されているいくつもの範疇の解体」でしかないのである<sup>15)</sup>。そして、この範疇の解体が人間間の相互暴力の引き金となると考える。何故なら、非差異化が外的媒介でしかなかった欲望を内的媒介へと引き上げてしまうことになるからである。今までは階級や社会的地位や高序列等への憧れは、主体が媒体者とは組織社会の中で非常に遠い存在であって、その欲望は単なる外的媒介によるものでしかなかったが、階級という範疇を解体することによって主体と媒体の接近は避けられることなく、欲望は内的媒介という構図を生み出し相互的媒介が生じるのである。この差異の消失による暴力的混乱を、ジラールはギリシア悲劇から引用し解説して以下のように断言する。

暴力的混乱をひきおこすものは差異ではなくて差異の消滅である。差異の危機は人間たちを、彼らから一切の弁別性格、一切の《それがそれである特質》を奪ってしまう永劫の顔のつき合わせに投げ込むのである。言語それ自体がおびやかされる。《あらゆるものが対立し抗争する》のである<sup>16)</sup>。

他者との差異によって個人個人がそれぞれに自己の特質を理解し他者との

---

の消失」であると主張している。

15) 同上, pp. 79-104。ジラールは、原始的社会の中で、双生児が宗教的に「殺戮に酔った戦士、近親相姦を犯した者、あるいは月経中の女と同じように穢れている」として殺害されていたことや、兄弟同士の酷似による人々の恐れや兄弟間の争い等、それらで問題になっているのは、差異の消失なのだと指摘している。

16) 同上, p. 83。

違いを確認できていたにもかかわらず、差異の縮小消滅によって他者との差異が不明瞭になり、やがて外的媒介による欲望が内的媒介に打って変るのである。そうすると、先に述べた媒体へ同化しようとする欲望が起こる。「欲望する主体は、自分の媒体そのものに成りたい」と願い「媒体の存在を呑みつくし同化しようとする夢み」、「媒体の力と自分自身の《教養》との完全な総合を想像」し、「自分自身であることを止めずに他者になろうとのぞむ」のである<sup>17)</sup>。ここから対立感情の共存が生まれ、敵対意識は主体と媒体の相互的な対抗関係を生み出し暴力が生じる。模倣（ミメーシス）的欲望論の展開で述べた通りである。この相互的媒介によって生じた模倣による暴力は、とめどなく周囲に伝播しながら集団に蔓延し、共同体は敵対する者同士で溢れ、その秩序は危機に瀕するのである。しかし、この無秩序と暴力を無限に続けていくわけにはいかない。そこには死が待ち受けているからである。「本体論的病いは絶えず悪化し」、「その自然的終極は死」なのである。集団の性格を帯びた形而上的欲望現象の最終段階で個人的自殺とともに「集団の自殺あるいはほとんど自殺ともいえる状態を見る」ようになる。差異の消滅は、共同体に絶望的な危機を生じさせるのである<sup>18)</sup>。

### 3.2 スケープゴート論

このような差異の消滅による危機の回避として、共同体によるひとつのメカニズムが作動する、とジラルールは指摘する。それが、スケープゴートである。これは「危機を解消し、共同体を自己破壊から救う唯一の手段」であり、「唯一可能な和解の方法」である。端的に言えば「無意識の模倣それ自体によって指名され、全員一致で選ばれた一人の犠牲者にこうした怒りや集団的な感情を集中させる」ことなのである<sup>19)</sup>。さらに、ジラルールは「いけにえを使うこ

---

17) ジラルール『欲望の現象学—文学の虚偽と真実』, p. 60。

18) 同上, pp. 309-310。

19) ルネ・ジラルール『文化の起源—人類と十字架』(田母神顯二郎訳, 2008), 法政大学出版局, p. 103。

とによって共同体内の内的緊張、怨恨、敵対関係といった一切の、相互間の攻撃的傾向を吸収するのだ」と述べて、スケープゴートのメカニズムを明確にしている<sup>20)</sup>。

「動物には個々に、敗者の死にまで戦いが展開していくことのないようにするいくつもの」本能といえる調整機構が備わっているが、「人間にはそれらに類似したメカニズムが欠けている」ことから欲望の模倣は延々と続いていく。そして先述した通り、それらの欲望は本質的に他者からの模倣であり、手本となる欲望から主体の欲望は写し取られ、また「同一の対象に収斂する二つの欲望は、互いに相手の障害となる。欲望にもとづく一切のミメシス〔模倣〕は、自動的に、争いに通じ、その模倣に伴う勝利や敗北によって模倣の傾向を強化していき、争いは絶えず激化し、欲望を模倣するごとに敵対する欲望の暴力に遭遇するのである。この模倣的欲望は、穢れの伝染と同じで共同体全体を巻き込んでいく。この破壊的プロセスを停止させるためには、特定の犠牲者を選択し暴力の再発防止のための儀礼を断行しなければ、共同体全部が破壊されてしまう<sup>21)</sup>。スケープゴート理論は、このような共同体の壊滅的危機に際して、ひとりの人間を犠牲にすることによって、全体の連帯性を取り戻す行為であるとジラールは説明する<sup>22)</sup>。そして、ジラールは原初のある時点で「自然に起こった最初の殺害が、共同体の人々を実際に結束させ、現実の模倣の危険性にけりをつけた」ことから、スケープゴートにおける儀礼が始まったのだと供犠行為自体の発生の起源を仮定するのである<sup>23)</sup>。また、古代の共同体の中には、スケープゴートによる供犠の確立に失敗したものもあったと考え、そのような共同体の結末とスケープゴートによる供犠の発生を以下のように述べている。

---

20) ジラール『暴力と聖なるもの』, p. 12。

21) 同上, pp. 228-234。

22) ルネ・ジラール『世の初めから隠されていること』(小池健男訳, 1984), 法政大学出版社, p. 34。

23) 同上, pp. 35-36。

幾つかの古代集団が生き残れなかったのは、彼らのミメシス的對抗意識が、彼らを自己破壊から救ってくれるだけの、十分な求心力を持った犠牲者を作り出すことができなかつたためだと推測することもできます。また、この現象を祭式化したり、永続的な宗教システムを作るのに成功しなかつたがゆえに滅びた集団もあったでしょう。私が常に主張しているのは、文化の起源はスケープゴートのメカニズムに立脚しているということであり、厳密に人間的な最初の制度は、意図的で計画的なスケープゴートの反復であるということです<sup>24)</sup>。

つまり、供犠とは原初に起こった殺人による秩序の回復を模倣しているに他ならないということである。また、このスケープゴート理論での原初の殺人に続く「身代わりの山羊」、つまり反復されていく犠牲者は供犠の機能上の意味において、まず身代わりとしての作用が働くために共同体の一員との類似性を持つ者である必要がある。そして、親族や近親者からの復讐の危険性のない者であるという恣意的な選択がある。さらに復讐という観点において付け加えると、身代わりの山羊は、復讐の義務を負うような親族を持たない、捕虜や身体的畸形者、または精神的異能者のような共同体から逸脱している特殊性を帯びていることがふさわしいという。そのように選択された犠牲者は、供犠において身代わりの山羊として多くの他者の中でひとりの敵対者として取り上げられ、共同体の全ての人間の分身となり、共同体の全員と対立することになる。それまでは、共同体の危機的状況の中での対立の構図が個人対個人であったのに対し、危機的状況打破のための儀礼において、その構図は一変してひとり対全員の対立という様相となる。そして、それは多くの場合、一種のリンチというような全員が参加してひとりを殺めるといった暴力行為となる。共同体に拡散した模倣による暴力の軋轢の種を、身代わりの山羊の上に

---

24) ジラルール『文化の起源—人類と十字架』, p. 107。

偏在させ、生贄として全員の参加によって殺害するのである。

### 3.3 満場一致の暴力

ジラールは、これを「満場一致の暴力」と呼んで、供犠の機能における必要不可欠な土台であると考えている。この満場一致の暴力によって、犠牲者である身代わりの山羊が暴力を排泄し共同体に平和と秩序を回復させる力になるという。つまり、殺人という暴力によって、良い意味での儀礼による模倣の作用が起こると断言するのである<sup>25)</sup>。この作用をジラールは宗教的で本質的な現象であると言い、その特徴を「二重の転移」と呼ぶ。「一つは攻撃の転移であり、もう一つは和解の転移」である<sup>26)</sup>。このことからジラールは、欲望の模倣が共同体を分裂に追いやるのに対して、暴力の模倣は共同体の結束を確立させ平和を取り戻すという解決策となると主張し、この暴力が共同体を安泰に導く「良い暴力」であると位置づけ、以下のように、この暴力こそが「聖なるもの」だと述べている。

他の暴力によってしか暴力に対抗できない瞬間が、いつもやってくるように思われる。そんな時、それに成功するか失敗するかなど問題にならない。勝利を収めるのは常に暴力である。暴力には、ある時は直接的で積極的な、ある時には間接的でネガティブな、異常な模倣効果がある。人々が暴力を制御しようとつとめればつとめるほど、彼らは暴力に餌を与えることになる。暴力は、人がそれに対置する障害物を、行動の手段に変えるのである。暴力は、消そうとして投げ込むもの一切を貪り食って激しく燃え上がる焰に似ているのだ。… 聖なるものとは、人間がそれを制御できると思えば思いこむほど、それだけ確実に人間を制圧する一切のもののことだ。し

---

25) ジラール『世の初めから隠されていること』, pp. 34-72。

26) 同上, p. 53。

ルネ・ジラルールにおける模倣（ミメシス）的欲望論とキリスト教

たがって人々をおびやかすのは、…人間それ自身の暴力なのだ。聖なるものの真の核心、ひそかなる中心を成すものは、そうした暴力なのだ<sup>27)</sup>。

### 3.4 文化と神々の誕生

そして、満場一致の暴力という聖なるものによって殺されたその身代わりの山羊は、共同体に平和と秩序を回復させるだけではなく、贖罪の山羊としての浄化的機能(カタルシス)によって、共同体の穢れを一掃するのである。そして、犠牲者は平和と秩序と豊饒と癒しと浄化をもたらす超越性を帯び神格化する。そのような意味においてジラルールは、「神が誕生するためには、満場一致の暴力の仲介が要るの」だと言及する<sup>28)</sup>。そして、全ての宗教において、この満場一致の暴力が神を出現させ犠牲者に対する信仰を創出するのだと下記のように記している。

最初に選ばれた身代わりの山羊が、一切の害悪の責任を引き受けることで、個人間に生じた亀裂を解消し、共同体の危機に終止符を打つのであろう。身代わりの山羊が働きかけるのは、危機のために弛緩した人間関係のみであるけれども、しかしペスト、干ばつ、その他客観的な厄災といった外的な要因にも同様に働きかけているかのような印象を与えるのである。信念がある一定の限度を超えたところでは、身代わりの山羊の効果は、迫害者と犠牲者とのあいだの関係を完全に転倒させてしまう。そしてこの転倒から、聖なるもの、共同体を創始した祖先、神々が生まれてくるのである<sup>29)</sup>。

---

27) ジラルール『暴力と聖なるもの』, pp. 49-50。

28) ジラルール『世の初めから隠されていること』, pp. 58-230。

29) ルネ・ジラルール『身代わりの山羊』(富永茂樹訳, 1985), 法政大学出版局, p. 72。

このように、ルネ・ジラルルの考察する宗教の起源は、人間同士の模倣（ミメーシス）的欲望が引き金となって始まったとされる。他者を模倣することによって相互が同一の対象を欲しライバル化する。それにより暴力が引き起こされ、さらに相互に個々の欲望を模倣し合うことによる欲望の悪循環が周囲の人々に伝染病のように襲い掛かり、大衆は他者の欲望を模倣し合い暴力で染まる。欲望を制御する機能をもたない人間たちは、それぞれが自身の模倣された欲望に従い暴力を生み出し、さらにその暴力が欲望の媒介者からの報復という新たな暴力を生み、この暴力が多面的に連鎖していく。この暴力の連鎖によって混沌となった共同体は滅亡の危機的状況に陥ってしまう。このような壊滅状態の共同体で、民衆同士の暴力を制御する突破口を探し当てることのできなかった共同体は破滅していったのかもしれない。

しかし、その滅亡の危機に際して自然発生的ではあるが、集団死刑によるひとりの犠牲者の殺戮という出来事によって暴力の連鎖に終止符が打たれた。これが創始的満場一致による原初の供犠となり、儀礼的供犠はその原初の供犠の反復として共同体に平和と秩序をもたらす作用を持つことになった。これがジラルルの推察するスケープゴートの始まりである。そして、この暴力をジラルルは「定礎の暴力」と呼び、この最初の殺人を「定礎の殺人」と名づけている<sup>30)</sup>。また、この最初の犠牲者は神格化され、全てのものを超越した信仰対象、つまり神となり供犠を生み出した原初形態は各共同体において宗教となったという。以上が、ジラルルの模倣（ミメーシス）的欲望論の概略であるが、一体この仮説がキリスト教とどのようにかかわっているというのだろうか。ここからはジラルルのキリスト教に関する理論の探求を試みる。

---

30) ルネ・ジラルル『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』（岩切正一郎訳、2008）、信教出版社、pp. 133-137。

#### 4. ルネ・ジラールによるキリスト教における模倣（ミメシス）的欲望論の展開

##### 4.1 一神教と脱供犠化

ジラルールのキリスト教理解も、その土台は模倣（ミメシス）的欲望論にある。そして、その主眼は、キリストの十字架による犠牲が模倣的欲望を終結させるための従来の供犠と同様のものではなく、非供犠化の歴史的出来事であり、それは人類を模倣（ミメシス）的欲望の終幕に到達させる道を示し、キリスト教だけが非供犠的な唯一の宗教であるという啓示なのだという所にある。また、ジラルールの着目点の特徴はこの啓示が歴史的に、二つの段階を経て完成されたという点である。その第一段階は、神話部分の旧約聖書から啓示的内容を示す旧約聖書としての移行である。これにより、今まで繰り返されてきた犠牲者の神格化が拒否されるようになる。また、第二の段階における啓示をイエスの言動を綴った福音書であると考え、これを完全な啓示と断定している<sup>31)</sup>。

上記の「神話部分の旧約聖書から啓示的内容を示す旧約聖書としての移行」というジラルール独自の見解は、旧約聖書における供犠の形態に転換点があったとする彼の推考によるものである。例えば、ヘブライ人たちの供犠の形態が他宗教のそれと同様に、人間の生贄であったものが動物犠牲の儀礼や割礼といった仕様に置き換えられていると主張する<sup>32)</sup>。また、ジラルールは啓示の唯一性を一神教の排外性に見出すのである。多神教では供犠的な基盤を多く抱えているため、古代世界においてスケープゴートのメカニズムが機能する度に新たな神が出現してしまう。これに対して、ユダヤ教やキリスト教は一神教として、犠牲者を神と崇めることを拒否する。そのことから、ジラルールは一神教の神は完全に脱供犠化していると語るのである<sup>33)</sup>。

この脱供犠化の変遷について、『創世記』や『出エジプト記』では人間の生贄、

---

31) ジラルール『文化の起源—人類と十字架』, p. 148.

32) ジラルール『世の初めから隠されていること』, pp. 388-389.

33) ジラルール『文化の起源—人類と十字架』, p. 148.

特に初子の生贄が規則的に行われていたと思われる供犠の儀礼から、先述の動物犠牲の儀礼や割礼に置き換えられるようになっていったという。そして、『創世記』のアブラハムによるイサクの犠牲の物語を、人間の供犠の放棄と動物の供犠への移行を表明するものであるとし、その後のイサクによる次男ヤコブ祝福の場面で、子山羊が贖罪の食事として出される物語のテーマが、動物犠牲による供犠の創始なのだと推論している<sup>34)</sup>。また、この供犠儀礼の移行には段階があり、その段階ごとに犠牲のメカニズムは「人間化」されたシステムへと変化しているという。以下が、ジラルルの考えている供犠メカニズムの段階的变化である。

第一の段階は、いわゆる族長時代の、人間の供犠から動物の供犠への移行の段階です。第二の段階は、『出エジプト記』の段階で、その特徴は過越祭という制度です。過越祭は血なまぐさい供犠ではなく、仲間うちの食事にアクセントを置いています。そしてそこにはもう、厳密な意味での供犠はありません。第三の段階は、あらゆる供犠の放棄に対する預言的な意欲の段階です。そしてこの段階は、もちろん、福音書のなかで初めて達成されるのです<sup>35)</sup>。

供犠の移行以前という第一段階においてさえ、ジラルルによると旧約聖書の神話は他の宗教を生み出した神話とは倫理的側面において、全く別物に編纂されているという。それらは教訓として、「暴力から生まれた文化は必ず暴力にもどる」と論じているのである。「ノアの箱舟」の神話を引き合いにする

---

34) ルネ・ジラルル『このようなことが起こり始めたら』（小池健男訳、1997）、法政大学出版局、p. 74、『世の初めから隠されていること』、p. 238。

35) 同上、p. 389。小池健男が、『創世の書』、『脱出の書』、『復活祭』と訳出しているものを、聖書に使用されている書名や記述にならない、それぞれ『創世記』、『出エジプト記』、『過越祭』と表記しなおした。なお、本論で引用する聖書はすべて、新共同訳聖書からである。

と、「危機が訪れると文化はことごとく水没し、神の懲罰にひとしい文化破壊は、基礎づくりの殺害の一時的な効果によって暴力からうまれまた暴力へもどる過程の、宿命的な最終点として」著わされているという<sup>36)</sup>。また、そもそも神話とはひとりを殺害することによって共同体に平和を回復させて基礎を築いた満場一致の暴力の反映であり、何らかの暴力行為の報告書ではあるが、犠牲者が神格化されると同時に迫害者の罪状が隠べいされるなど、事実を曲げゆがめられた形で成される物語である。何故なら「宗教と文化とは、その創始と存続のために暴力を隠べい」し、「暴力をめぐる表象を消去してしまおうとする意志が神話の進化を支配している」からである<sup>37)</sup>。旧約聖書の物語の背景にも世界中の神話の標準に一致する、殺害を隠べいするような事実を歪曲したものが存在したが、ユダヤ教はそれらを対立解消の暴力が破滅をもたらすという倫理的観点の立場から編纂したのだ、と以下のようにジラルールは考えている。

ユダヤの聖書編集者たちは最初に、批判的な目で手なおしを行っているうちに、次のことを認めたのです。つまり、犠牲者は罪を犯していないということ、殺人の上に築かれた文化は初めから終わりまで人殺しの性格を保ちつづけるということ、そしてこの性格は、ひとたび暴力起源の支配の効果、供犠の効果が尽きてしまうと、文化に逆らってもとにもどり、文化を破壊するに至るということ、を認めたのです<sup>38)</sup>。

上記のような認識による編集作業を通して、編纂された物語のひとつが「カインとアベル」の物語である。この神話はアダムとエバによって産み出された、「カイン」という名称の最初の殺人を犯した最初の共同体が、アベルという犠

---

36) 同上, pp. 243-246。

37) ジラルール『身代わりの山羊』, pp. 121, 153。

38) ジラルール『世の初めから隠されていること』, pp. 246-247。

犠牲者の殺害において罪が明らかにされ、アベルは「聖書によって発掘された大勢の犠牲者たち、たいていは集団全体から押しつけられていた罪状を聖書によって解除してもらった犠牲者たちのうちで、最初の人」となったというものである<sup>39)</sup>。

ヨセフの物語も同様に、旧約聖書の編集者たちが上記の認識の元、神話を手なおししていると推測している。特に、この物語ではヨセフの潔白を証明しその名誉を回復させるために、前半ではJ文書とE文書を組み合わせて編纂されており、二つの別々の物語を並列することによって共同体の犯した暴力を示そうという意図が見えるというのである。そして、幾度となく示されるヨセフの無罪性による犠牲者の名誉回復は、犠牲者の非神格化の効果を伴う。そのような意味においても、まさに旧約聖書における神話は他の神話とは形態が逆になっていることがわかる<sup>40)</sup>。

第二段階における、旧約聖書の供犠の移行は『出エジプト記』であり、これはユダヤ教自体の創始の神話でありながら、自らの共同体をエジプト社会の混乱の扇動者として著わし、自分たちが追放された共同体となることによって解決された供犠の危機を示すという、新しいタイプの共同体の組織が見て取れるように作られている。そして、第三段階においてジラールは、イザヤ書に登場するいわゆる「苦難の僕」に焦点を当て、その僕の中に、解放者であり、かつ王である「勝ち誇るメシア」と、ヤハウエの僕として「苦しむメシア」の二重のテーマを発展させているという。この二重のテーマから、ジラールは旧約聖書のヤハウエの役割の曖昧さを指示し、古い文化形態の消滅にいたる

39) ジラール『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』, pp. 135-137。

40) ジラール『世の初めから隠されていること』, pp. 247-252。「J文書」,「E文書」とは、聖書学における「文書仮説」から来たもので、ドイツの旧約学者ユリウス・ヴェルハウゼンの研究が有名である。その概略は、旧約聖書の特にモーセ五書が4種類の原因資料から編纂されたものであるという仮説である。その4つの資料名は、J(ヤハウイスト資料), E(エロヒスト資料), D(申命記史家), P(祭司資料)として知られる。

までのプロセス的なものであり完成された啓示とはなっていないと指摘する。この推察についての明確な説明は精神科医ジャン＝ミシェル・ウグルリヤンによって、以下のように言い表されている。

原始時代の宗教的なもののすべての様相にほぼ相等しい影響を与えているはずの、一種の未完成なものが、旧約聖書にはあることとなります。神話は、それとは逆方向の考え方によって研究されていますが、それでも生き残っています。供犠も批判を受けながら生き残っています。律法も単純化されて、隣人愛と同じことだと言われながら生き残っています。そしてヤハウエは、ますます非暴力的な、ますます好意的な形で示されながら、いまでも復讐を忘れない神としてとどまっています。神は報酬を求めるという考え方も生き残っています<sup>41)</sup>。

その結論としてジラルールは、「旧約聖書が未完成のままに残したものを、福音書のテキストだけが完成する、ということを証明することができる」とし、「ユダヤの聖書が意図して果たさなかったものを」、福音書は完全な形で作り上げたことと推知するのである。そして、この福音書という完成された「啓示」を「キリスト教の伝統は、いつも…主張してき」た、と語るのである<sup>42)</sup>。

#### 4.2 完成された啓示としての福音書 — 全人類への啓示

ジラルールの信じる完成された福音書という「啓示」が、全人類に告げられていることを示すため、彼はイエスによるファリサイ人への呪いの解説から始める。『マタイによる福音書』23章34節以下と『ルカによる福音書』11章50節を例にとり、最初の犠牲者であるアベルから「イエスの読んだはずの聖書全

---

41) 同上, p. 259。

42) 同上。

体のなかで、殺された最後の人」に至るまでを福音書が取りあげていることを、満場一致による殺害の犠牲者の要約であると考え、また定礎の殺害によって殺められた全人類の義人たちのすべてであると訴える。特に、カインの共同体に至っては有史以前の神話であり、ユダヤの文化だけの限定的なものではないと捉えるのである。「アベルによってその原型が示されているこの種の殺害は、この世の一つの地域だけに、歴史上の一つの時期だけに、限られているもの」ではなく、それは「世界的な現象」であって、そのような意味においてイエスの言葉はファリサイ人だけに伝えられているのではなく「人類全体を問題」にしていると結論づける。これにより、旧約聖書の曖昧性を福音書は超克し、全人類へ発信されているものであると示唆するのである<sup>43)</sup>。

このように、旧約聖書における供犠的儀礼の段階的移行を経て、新約聖書の福音書による完全な啓示が著わされるようになったという。つまりそれは、「旧約聖書が、…供犠的なものから非供犠的なものへの道程である」ことを理解させ、危機的状況にある現代にあって福音書という完全な啓示を世界中に広がった形で示し、地球上のあらゆる人々の正しい心構えとして役立つ目的があるとジラールは主張する<sup>44)</sup>。

#### 4.3 サタンとスカンダロン

その啓示による真の目的を説明するために、ジラールは独自の聖書解釈に

---

43) 同上, pp. 260-263。ジラルールの『マタイによる福音書』23章の引用文は以下の通り。「…預言者、知者、学者をあなたたちに遣わすが、あなたたちはその中のある者を殺し、十字架につけ、ある者を会堂で鞭打ち、町から町へと追い回して迫害する。こうして、正しい人アベルの血から、あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血に至るまで、地上に流された正しい人の血はすべて、あなたたちにふりかかってくる。はっきり言うておく。これらのことの結果はすべて、今の時代の者たちにふりかかってくる。」

44) ジラール『このようなことが起こり始めたら』, p. 125, 『世の初めから隠されていること』, p. 420。

よって模倣（ミメシス）的欲望論と啓示の関係性を解き明かしていく。その至要たる概念が、「サタンとスカンダロンは一つの同じものであり」、これが福音書における「模倣的循環」の存在を明確化させるという解釈である<sup>45)</sup>。この釈義について彼は、福音書にある受難予告でのイエスとペトロのやり取りを例にあげる<sup>46)</sup>。ペトロはイエスの受難予告を否定したため、イエスから「サタン」呼ばわりされた挙句、「おまえはわたしの躰（スカンダロン）である」という厳しい叱責を受ける。ジラールによると「サタン」と「スカンダロン」は、同じものではあるが、ひとつの同じ現象の違った側面をそれぞれ強調しているという。「サタン」とは模倣（ミメシス）的欲望のメカニズム全般を指しており、「スカンダロン」は模倣（ミメシス）的欲望のサイクルの初期段階で、相互に他の障害になる存在を意味する。イエスから叱責を受けたペトロの場合、イエスに対して受難予告を否定しつつ自分の望みと自分の持っている世俗的な野望をイエスに吹き込むことで、自分自身を欲望のモデルとみなすようにとイエスを誘っているわけである。その誘いを通して、ペトロは躰の種を蒔く張本人となり、かつ、模倣循環にイエスを引き入れようとするサタンとなっているのだとジラールは指摘する<sup>47)</sup>。と言うのも、「サタン」とは模倣の全過程に与えられた名称であり、暴力の循環的なメカニズム自体を表すものだからである<sup>48)</sup>。この循環的なサタンによる模倣の仕組みをジラールは以下のように明示している。

---

45) ジラール『文化の起源—人類と十字架』, p. 190。

46) 例としてあげられている『マタイによる福音書』16章23節は以下の通り。イエスは振り向いてペトロに言われた。サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」邦訳では「邪魔する者」と訳されているが、原語のギリシア語やジラールの用いるフランス語訳では、「躰きである」となっている。

47) ジラール『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』, pp. 62-64。

48) ジラール『世の初めから隠されていること』, p. 266。

犠牲者を、模倣的に罪ある者とみなし…。サタンは、この罪が現実のものであると共同体全体を納得させている模倣そのものである。この説得術によって、彼は最古の、最も伝統的な名のひとつを得ている。ヨブ記において彼は、神、さらには民衆のかたわらにあって、主人公の告発者である。差異化された共同体をひとつのヒステリックな群衆に変えることで、サタンは神話を生み出す。彼は、つまりきによって激化した模倣からほとぼり出る、一貫した告発原理だ。不幸な犠牲者が、その擁護者をなくし、完全に孤立してしまうと、鎖を解かれた群衆からその犠牲者を守ってくれるものはなにもない。どんな報復も恐れることなく、全員で犠牲者に襲いかかることができる<sup>49)</sup>。

「サタン」という名称が多用されることで、宗教的空想あるいは非現実的な観念として受け取るのは早計である。ジラールは、サタンの実在を否定した上で、サタンとは満場一致によっていかなる良心の呵責もなく犠牲者を殺害する時の群衆についての強力な比喩であると表現する。それは、まさにスケープゴートのメカニズムの無意識部分にあたる構造の主体であり、悪しき模倣（ミメーシス）的欲望のシステムそのものであるとし、「外部のいかなる調整も持たずに、このシステムは完全にそれ自身で機能」するという。つまり、サタンとは実体的な存在ではなく人間関係を支配する邪な構造形態のことなのである<sup>50)</sup>。

このような概念から、人間であれば誰もがスカンダロンとなり得るのである。そして、同じくサタンという存在にもなる。何故なら、模倣（ミメーシス）的欲望は個々の人間の内に潜んでおり、無意識の内に模倣（ミメーシス）的欲望を行使することがジラールの考える人間の原罪だからである<sup>51)</sup>。そのシステ

49) ジラール『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』, p. 67。

50) ジラール『文化の起源—人類と十字架』, pp. 190-192。

51) 同上, p. 146。

ムを行使しようとする原罪は、アダムから現代に至るまで延々と受け継がれてきた人間の習性なのである。その意味において人類は、模倣（ミメーシス）的欲望のシステムの中で残存し続け、それが尋常一様の社会秩序となっているのである。このことからジラールは、「この世の秩序は神に属するようなものでは」なく「それは供犠的であり、ある意味でサタンの」であると語る。つまり、この模倣（ミメーシス）的欲望のシステムが支配するこの世界にあって、まさに「サタンは秩序」そのものなのである<sup>52)</sup>。ジラールはこの世の秩序という意味において、身代わりの山羊という供犠自体がサタンというあらゆる王国の原理作用の裏づけであることを、以下のように述べるのである。

サタンの王国は、数ある他の王国と同じではない。サタンはあらゆる王国の原理である、と福音書ははっきりと述べている。どうしてサタンが王国の原理となりうるのであろうか。暴力による追放およびその帰結としての欺瞞の原理であるがゆえである。…もっと根源にさかのぼって言うならば、文化を創始し、そうした儀礼の元型となる秘められた行為、すなわち全員一致して自発的になされる身代わりの山羊の殺害における暴力である<sup>53)</sup>。

そして、この原理となっている「模倣のシステムとはいつまでたっても人類を奴隷の状態に置」き、「サタンそのものが永久に排除されるということはけっして」あり得ないとジラールは語る。それ程、人類の持つ模倣（ミメーシス）的欲望とそれを無意識の内に発動させる原罪の関係性は深いということである。このような脱供犠化することを許さないサタンの支配する秩序の中で、たったひとつ、「サタンを排除できるのは神の霊のみ」なのだとジラールは確言するのである<sup>54)</sup>。

---

52) ジラール『このようなことが起こり始めたら』, pp. 77-79。

53) ジラール『身代わりの山羊』, p. 311。

54) ジラール『このようなことが起こり始めたら』, p. 77。

#### 4.4 神の国

これまで聖書にある儀礼の段階的変遷を考察してきたが、それではジラールの主張する福音書の完成された啓示とはいかなるものなのであろうか。この完成について彼は、福音書に著わされたイエスの十字架の死に至るまでの言動とその生涯全般、およびその神性に視点を向ける。そして、福音書とキリストが「供犠的な世界からの初めての脱出であった」と強調するのである<sup>55)</sup>。ジラールにとって福音書とは「供犠を退けるため、供犠の効力をすべて否定するため」に福音記者によって編纂された啓示であると確信している。そのひとつの好例が、ファリサイ派の儀礼偏重主義に対するイエスの言葉にある。『マタイによる福音書』9章13節で、イエスは旧約聖書を用いて「『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい」と語り、真っ向から供犠を否定するのである<sup>56)</sup>。

この供犠の否定を明らかにしつつ、「サタンの王国」とは真逆の「神の国」についてを展開していく。「神の国」はジラールにとって、一般的に考えられたりするような意味での「ユートピア」(天国)とは関連性がない。その自らが思い描く「神の国」を想像させるためにイエスの「山上の説教」を題材にし、そこには「神の国」の意義と範囲とが明瞭に著わされていると推知する。その趣旨と目的は敵同士の和解であり、あらゆる人間に暴力を思いとどまらせ「模倣の危険性に終止符を打つこと」なのである。また、イエスの語る「悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」という教えとそれに続く言葉はその究極であって、「無条件の暴力放棄だけが、また必要とあれば一方の側の暴力放棄だけが、(模倣的欲望の)分身たちの関係を終結させることができ」る、と述べるのである<sup>57)</sup>。ジラールは、

55) ジラール『世の初めから隠されていること』, p. 336。

56) 同上, p. 295。引用されているのは、『ホセア書』6章6節。

57) 同上, p. 322。「山上の説教」は『マタイによる福音書』5章1節以下で、「憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。平和を実現する人々は、幸いである、その

イエスの提言の中核があらゆる人間に対して暴力を捨て去ることであると、  
「神の国」についてさらに論究している。

暴力とは隷従を押しつけることです。暴力は人間に、神ばかりか  
あらゆるものの誤った見方を押しつけます。暴力が閉ざされた国で  
あるのは、まさにこのためです。暴力を避けるということは、この国  
を避けて、たいていの人が思いも及ばぬようなほかの国に、つまり「愛  
の国」にはいることです。「愛の国」、それはまたイエスの父である  
真の「神の国」、暴力にとらわれていた人々がまったく考え及ばなかつ  
た「神の国」でもあります<sup>58)</sup>。

ジラルールはさらに、神の国の規則についても以下のように言及する。

＜神の国＞の規則はユートピア的なものではまったくありません。  
それはつまりくもしも模倣による敵対に終止符を打ちたければ、す  
べてを敵対に委ねよ>というもののなのです。それは敵対を未然に防  
ぐことになるはず<sup>59)</sup>。

従って、ジラルールの主張する「神の国」とは、人間同士の関係から、全て  
の復讐や、いかなる報復的行為も徹底的に排除した、模倣（ミメシス）的  
欲望から脱した世界のことなのである。この主張は、戦争論で議論される「絶  
対平和主義」と意味的に酷似しているようであるが、目的という側面では全く  
異なっている。絶対平和主義には平和を求める願いや手段など様々な意味が  
込められてはいるが、その目的には暴力を生み出す本質的な模倣（ミメシス）  
的欲望からの脱却というような脱供犠化の狙いなど皆無だからである。

---

「人たちは神の子と呼ばれる」という教えが続いていく。

58) 同上, p. 323。

59) ジラルール『このようなことが起こり始めたら』, p. 76。

そして、脱供犠化の完全なる啓示は、一方においては神からの呼び声、また一方においては模倣行為と自由との作用という両者の関係性に結びつくという。これについての説明のため、ジラールは『ヨハネ福音書』に記載されている、イエスと姦通の女の物語を参照する。この物語で律法学者たちは、姦通罪で捕えられた女を石打にすることをどう考えるのか、とイエスに詰め寄る。石打の刑は、はるかな昔に共同体をスケープゴートのシステムによって和解に導いた供犠的な伝承的模倣であり、全員一致の暴力が制度として体系化され、モーセの律法のひとつとして『レビ記』に収録されたとジラールは考える。

この律法学者たちの問いかけに、イエスは「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」と答えている。それまでは、集まった群衆は模倣の作用によって、石打刑に処する方に心を傾けていたが、イエスの言葉の力によって現実に暴力を始動するという一線を越えることができなかった。最初の石を投げる者が、もしこの時いたのなら模倣の作用が働き全員が石を投げ始め、身代わりの山羊のメカニズムが起動したはずである。しかし、この模倣は、石を投げないという反対の行為にも逆転し得る。イエスの言葉は、群衆を個人的な次元に引き戻し、全員一致の暴力というシステムを解体させたのである。これが、福音書における脱供犠化の教えであり完全な啓示の意図するところなのである。「人々はそれぞれ、〈啓示〉の意味を理解するのにかかった時間のちがいに応じて、一人また一人と立ち去って行き」、群衆は次第に解散していった。石を投げないという、最初に成された決意は、模倣（ミメーシス）的欲望と同じように急速に伝染するという社会的なメカニズムを反映している。ただ、この逆転の模倣、つまり非暴力の模倣の引き金を引くためには、「パラクレトス」と呼ばれる聖霊の助けがなければ不可能なのだジラールは考えている。当然、この場合における「パラクレトス」は、イエス自身であった。「パラクレトス」はギリシア語で「弁護する者」を意味するが、ジラールによると、イエス自身が十字架に至る受難によって、犠牲者

たちの最初のパラクレトスとなったのだと示唆するのである<sup>60)</sup>。

#### 4.5 人類で初めての脱供犠化と贖罪論の否定

当然ではあるが、受難による最初のパラクレトスとなったという模範は、イエスの十字架が最初の脱供犠化となったという考えに結びついている。一般的にキリスト教は、イエスの十字架での犠牲が人類を罪から贖う代価であると信じている。流されたイエスの血は人々を罪から清めるのである。つまり、イエスは十字架に掛けられた生贄なのであって、これは福音書に登場する神の小羊であるイエスと、旧約聖書のスケープゴートに登場する身代わりの山羊をキリスト教は同一視しているということである。旧約聖書の身代わりの山羊は、後に来る真の生贄の雛形であり、イエスというキリストの生贄の先駆けであり模型的儀礼であると見なしている。

しかし、ジラルールはこの伝統的な贖罪論という概念を全くの誤りであると断言する。確かに受難は人類に救いをもたらす行為として福音書に描かれてはいるが、イエスの死が供犠であったとは示されておらず、さらに贖罪であるとか身代わりであったとかという意味においても供犠的儀礼であったとは定義

---

60) 同上、pp. 192-202。8章3節からの引用は、以下の通りである。律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」…彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」…。これを聞いた者は、年長者から始めて、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

されてはいないと主張するのである<sup>61)</sup>。そして、もしイエスの死が供犠的なものであったと考えるのなら、それ以前から延々と続いてきた模倣（ミメーシス）的欲望による悪循環からの解放がなかったことになってしまい、人類はいまだサタンの原理の中に隷従する救いのない世界に埋没していることになってしまうという。旧約聖書からの啓示における儀礼的な変遷を通して、福音書という完成された啓示がなされたにもかかわらず、聖書解釈者たちは新約聖書に照らして旧約聖書を読むべきところを、気づかずにその逆の読み方をしているのだと苦言を呈している。そのような読み方は、スケープゴートのシステムと模倣的暴力の循環について考えがおよばなかったため、キリスト教以前の供犠とイエスの十字架における一致点や連続性ばかりに目が向けられていたからに他ならないという。また、イエスの受難を供犠として解釈させてしまう『ヘブライ人への手紙』のような新約聖書のテキストによってキリストの受難とそれ以前の供犠との間の違いに気づかず、「古代律法」の供犠的儀礼と受難に連続性と一致を特定してしまったのだとする<sup>62)</sup>。

#### 4.6 受難と神話の比較

この間違ったキリスト教の伝統的解釈について、ジラールは確かにキリスト教と神話は酷似しており、再び神話に回帰したのではないかと疑ってしまうのは仕方のないことなのかもしれないとしつつ、イエスの十字架における非供犠化の特異性について、模倣的循環を生み出している神話と比較することで解説していく。神話と受難の相似とは模倣的循環あるいは「サタンの循環」であるが、その循環は第一に共同体の危機、次いで全員一致による暴力、そして最後に宗教的エピファニーであり、犠牲者の神格化である。しかし、両

61) ジラール『世の初めから隠されていること』, p. 296。

62) 同上, pp. 368-376。ジラールは『ヘブライ人への手紙』9章や10章にあるテキストを取り上げて「古代律法」を想起させている箇所を指摘する。次の文章はその一例である。「(キリストは) 世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。」

者には決定的な違いがある。

第一のそれは、神話が迫害者を隠ぺいし事実を歪曲して伝えるのに対して、受難を含む聖書の物語ではそれを余すところなく明らかにしていることにある。イエスの受難は、ユダヤ教の大祭司などの宗教指導者たちの陰謀から開始されたことが福音書に明示されている。これは、イエスの宣教活動によって沸き立つ民衆を垣間見た彼らが、ローマ帝国への刺激を恐れたことに起因している。この民族的危機に際して、共同体に平穏を取り戻すことを理由に、大祭司たちはイエスを身代わりの山羊に仕立てようとした目論見が明らかとされている。大祭司カイアファは、思案する祭司たちに対して「あなたがたは何も分かっていない。一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか」（『ヨハネによる福音書』11章49節～50節）と語るのである。この言葉をジラルールは、「供犠とその起源とについての決定的な認識である」という。そして「この認識はそれを語る者もまた聞く者も気づかないうちに表明され」という福音書の啓示でもある。また、このように大祭司たちの陰謀が明らかにされることを通して、福音書の啓示は身代わりの山羊の犠牲のシステムを解明しているのである。神話では常に迫害者の側から事実を捻じ曲げた物語が描かれる全員一致の暴力を、全く逆から、つまり犠牲者の側から事実を事実として描写しているのが福音書の特徴なのである<sup>63)</sup>。

第二の神話と受難における啓示の違いとは、集団的暴力における「暴力の根拠と合法性に関する問いにおいて対立する。神話では、主人公の追放（または殺害）は常に正当化されている。聖書の物語では、そのようなことは決してない。集団的暴力は正当化され得ない」のである<sup>64)</sup>。大祭司たちから尋問を受けた後、イエスはローマの行政官ピラトの元に連行され死刑判決を受けるが、それは法的な手順を踏んだものではなかった。ピラトは、合法性を重

---

63) ジラルール『身代わりの山羊』, pp. 183-192。

64) ジラルール『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』, pp. 162-170。

んじるローマ精神によってイエスを群衆に引き渡さないために、代替としてすでに合法的に断罪されていたバラバを群衆に差し出すが、群衆がバラバを拒絶するのを見てすぐにイエスを引き渡すのである。ピラトがバラバを代替として差し出したのは、正義感からなどではなく単に帝国上層部における行政官として、自分の汚名になるような混乱や暴動を避けようとしたためである。しかし、全員一致のシステムが作動した後にあっては、民衆はもうそれを変えようとはしなくなるのである。ピラトが合法性を欠いてでもイエスを引き渡したのは、群衆を恐れたからである。このように福音書は、全員一致の暴力の迫害者たちに正当性を与えず、犠牲者であるイエスの無実を明らかにしている。十字架での「イエスの死において、福音書に見出されるのは、混乱と再秩序化の循環のプロセスで、それは犠牲の全員一致のメカニズムにおいて頂点に達し、完成する」。このシステムの全容を解明した初めての啓示は、福音書なのである<sup>65)</sup>。神話が「犠牲者はそれなりの理由があって犠牲にされたのだ、と考えるかわりに、また殺害者たちが犠牲者を追放したのは彼らの功績だ、と考えるかわりに」、福音書はイエスの殺害の不当性を訴え「声を大にしてイエスの無実を、そして同じような型のすべての犠牲者の無実を訴える」とジラールはイエスの受難の唯一性を主張するのである<sup>66)</sup>。

最後に、神話と受難における啓示の違いは、神話では犠牲者が神聖化または神格化されるのだが、受難によってイエスが神格化されたのではないという事実である。神話では犠牲者が死んだ後に、迫害者たちの全員一致によって神格化され、それが宗教を生み出してきたのである。しかし、イエスの神性は受難という犠牲を通して全員一致による神格化などはなかったことが明らかなのである。以下に、ジラールがその詳細を述べている。

ほかの神話で起こることとは逆に、イエスのなかに神の子そして

---

65) 同上, pp. 51-60。

66) ジラール『このようなことが起こり始めたら』, p. 124。

神自身を見るのは、迫害者からなる全員一致の群衆ではなく、反体制派の少数派の人々、共同体から離れ、その全員一致性を破壊する離反者の小さなグループなのだ。それは<復活>の最初の証人の共同体、使徒と彼らを取り巻く男女である。この反体制的少数派と同じものは、神話のなかには見当たらない。神話的神格化の場合には、共同体が二つの不平等なグループに分かれ、そのうちの小さな方が神の申請を公言する、というようなことはおこらない。キリスト教的啓示の構造は唯一である<sup>67)</sup>。

このように、イエスの死が全員一致による犠牲者の神聖化、身代わりの山羊の神格化によって終わらず、模倣的暴力システム全体を通しての非神格化によって終わるという点がイエスの受難の特異性である。このシステムが機能せず非神話化するという啓示だけが真に宗教的なものであり、真に神からの啓示であることを示しているとジラルールは両者の違いを強く訴える<sup>68)</sup>。また、福音書の啓示は確かに神話に酷似しているが、慎重に探求すればその違いは明らかとも語る。何故なら、それはすでに旧約聖書の中で、部分的にでも習得しえたであろう真実の決定的な啓示だからである。それを完全な形で著わすためには、全人類を救う模倣的循環の犠牲者として、受難を受ける神自らの福音が必要とされたのである。キリストの神格化は、神話的聖性によって神々を作り出す模倣的熱狂のまやかしに立脚しておらず、全くその逆で、神話にある模倣（ミメーシス）的欲望の循環の解明、あるいはサタンの循環を明示する真実で完全な啓示に立脚するのである。そして、その三位一体の神は、神話的犠牲者のように歪曲から出現するのではなく、自ら進んで唯一の犠牲者の役目を引き受け、初めて、犠牲のメカニズムの十全な解明を可能にしたのである<sup>69)</sup>。

---

67) ジラルール『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』, p. 190。

68) ジラルール『このようなことが起こり始めたら』, p. 53。

69) ジラルール『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』, p. 200。

さらに、イエスの十字架を通して模倣（ミメシス）的欲望による循環が終焉したというしるしを、ジラールは『マルコによる福音書』と『ルカによる福音書』に見る。その記事には、イエスの死に際して、ユダヤ神殿の中の聖所と至聖所を隔てていた「垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた」ことが伝えられている。これは供儀の秘密から人間を隔てている幕がイエスの死によって打ち破られたことを現すのだという<sup>70)</sup>。

#### 4.7 神の国の時の啓示

福音書の重要性は、イエスの受難を啓示することで模倣（ミメシス）的欲望の循環を解明しサタンの仕組みを終焉に導き、人類の将来にこのサタンの循環からの解放を可能性としてもたらせることにあり、以下のようにジラールは確信する。

もはや身代わりの山羊が人間を救済しえず、迫害表象が崩壊し、牢獄にあった心理が輝きだすとしても、それは悪い知らせではなく良い知らせである。暴力の神は存在しない。真の神は暴力とは何かかわりもなく、遠くより媒介をとおしてではなくして直接にわれわれに呼びかけるのである。神がわれわれに送ってよこした息子と神とは同じひとつの存在にほかならない。神の王国の時が告げられたのである<sup>71)</sup>。

この神の国の時が告げられたという意味は、イエスの受難とそれに続く解明の業が、神と人間の間を阻んでいた原罪で損なわれた契約を復活させるということに他ならない。この解釈を教会は現在に至るまで見出すことができなかったが、それは理解できなかったとしても致し方なかっただろう。キリスト

---

70) ジラール『世の初めから隠されていること』, p. 381。ジラールの参照箇所は、『マルコによる福音書』15章38節および『ルカによる福音書』23章45節である。

71) ジラール『身代わりの山羊』, p. 315。

教が世界に広まりキリスト教的思想が多くの国々に伝えられるまでの、それは過度的段階の調整であったといえるだろう<sup>72)</sup>。

ジラールは、この解明を自身が初めて浮き彫りにしたと強調しつつ、人類は常にミメシス的であり続けるが、既にモデルとなるイエスが必要な模範者としてイエス自身を模倣せよと促している。当然、人々は自由な生活を営めるが、だからといってサタン的な模倣者である必要はない。果てしないミメシスの対立に身を投じるといふ束縛からの解放は始まっているのである。イエスを真似ること。そして、隣人を責めるのではなく隣人を赦すことを学んでいくようにと奨励するのである<sup>73)</sup>。

## 5. まとめ

欲望による暴力が他者を模倣することから始まるというジラールの仮説は、目に見えない人間関係の本質的な傾向を文学や神話を検証し模索し、紐解かれ見出されたものである。その基本的な構造が一見簡潔であることと、欲望による争いの関係といったような身の回りにある経験からも感知することの可能な論理であるため、ある意味においては受け入れ易い仮説といえるだろう。しかし、ジラールの比較引用する資料が、聖書は当然のこととして、『ドン・キホーテ』などの古典文学から始まりギリシア悲劇やニーチェなどの著した多くの哲学書、はてはドストエフスキーといった沢山の小説など、膨大な数の書籍群であり、その豊富な種類からその論理の幅の広さがわかるだろう。そのような膨大な資料をこなして論述を進める彼の知識の深さから熟思される模倣（ミメシス）的欲望論は、その実、単純な様相を呈してはいない。単に人間社会と暴力の関係性を論じるのであれば、その探求の範囲は限定的であり、それ程大きなものにはならないだろう。ジラールの場合、個々の欲望の分析から派生され得る社会構造のシステムに視点を向けて、人間の本質的理

---

72) ジラール『このようなことが起こり始めたら』, pp. 61-181。

73) ジラール『文化の起源—人類と十字架』, pp. 190-193。

解を築き上げ、その探求から原始共同体の淵源にまで遡り、欲望（ミメーシス）的暴力論を展開し、人間の文化や宗教の創始にまつわるメカニズムを解明しようとするのである。そのようなジラルルの遺した業績の壮大さは賞賛に値するだろう。

模倣（ミメーシス）的欲望論を土台とした、暴力的社会システムの循環は個人のレベルにおいても共同体に関しても妥当性があるといえるだろう。暴力のメカニズムの作用を考える場合、平和であると多くの人々が錯覚しているこの日本においてさえ、ホームレスへの暴力行為や貧困者差別、また学校や会社でのいじめ問題の激増、それら諸問題による自殺数の増加などを考慮に入れた場合、暴力的エネルギーが様々な共同体で蓄積され、一部ではすでに爆発していることを認識できるだろう。そういう意味において、全員一致の暴力という概念が大昔に創作されたジラルルの過去の産物などと決め込んだり、無視したりすることはできないのである。

模倣（ミメーシス）的欲望論を説くジラルルの研究成果は壮大なスケールでありながら詳細に解説や比較検証がなされており、肯首でき得る論理的体系である。しかし、欠点や問題点が存在することも事実である。その第一は、「定礎の暴力」による殺人によって原初の共同体が神を作り、世界中の様々な地域の共同体においても同様のシステムが働き、模倣（ミメーシス）的暴力の蓄積の発散による暴力が、共同体の文化や神々を創始していったという理論である。彼の理論が根本から間違っているということではなく、この仮説が検証不可能というところに問題があるのだ。ジラルルの意見に反して「定礎の暴力」を通過儀礼として残存し得た共同体がなかったとはいえず、むしろそのような通過儀礼を通過してきた共同体が存在している可能性は高いとも思える。だが、全ての共同体、文化、または宗教がこのスケープゴート理論の経験にもとづいて存在しているのかどうかは、絶対的とはいえない。絶対にあり得ないとは言い切れないが、全ての共同体がそのような過程を通過して来たとも断言することはできない。論理的には理解できる理論ではあるものの、それは、確認することすらできない想像に限りなく近い仮説でしかないのである。

第二の問題点は、キリスト教のみを完成された啓示にもとづく宗教であるとする仮説の根拠が、ジラルール自身の信仰に依拠したものではないかという疑問である。この疑問についての回答を得るために、ジラルールのキリスト教信仰と彼の理論の関係性を見てみると、以下のようにかなり曖昧である。

私自身の研究の結果が、私をキリスト教信仰に向かわせ、それが真実であることを確信させたということです。自分がキリスト教徒だからそのように考えるというのではなく、私の研究が私の考えることを考えるように導いていった結果、私はキリスト教信者になったのです。とはいえ、それは感情的なものが私の信仰に何の役割も果たしていないという意味ではありません<sup>74)</sup>。

また、ジラルールの「キリスト教徒信者」という定義は彼独特のものである。例えば、「改宗」という言葉は、キリスト教徒になるという意味で使用しない。ジラルールにとって「改宗」とは、自分自身の模倣（ミメシス）的欲望を各人が意識化することなのである。彼はこの「改宗」を通して、自分自身が模倣（ミメシス）的に欲望していることに気づき、同様に周囲の欲望に巻き込まれていることを観察できるようになったという。この「改宗」を経た後でジラルールは、聖書の中に模倣（ミメシス）的欲望の循環が明らかに記され、欲望の循環から解放されるように啓示されていることを発見したという。そして、その欲望から解放されたので、彼はキリスト教徒になったのだという。つまり、彼にとって「改宗」と「キリスト教徒になる」ことは別のことであって、「改宗」はそのシステムの気づきであり、「キリスト教徒になる」ことは、そのシステムからの解放を意味する。どの様な信仰の持ち方をするのかは個人の自由であり意見は尊重したいが、一般的な「改宗」や「キリスト教徒」の定義からかけ離れすぎて、その意見を受容する人間はそう多くないだろう。また、

---

74) 同上, p. 80.

模倣（ミメーシス）的欲望の循環システムを聖書の啓示に発見したからといって、それを啓示の完成形であると結論づけるのはかなり困難である。仮説の根拠も曖昧でありこの点についても、さらなる論理的説明が行われなければ、こじつけの様に捉えられる可能性は否めないため非常に残念である。

最後の問題点は、キリスト教の救いの解釈に混乱を生じさせている点である。ジラルルの主張するように、父なる神が生贄として自分の一番愛するひとり子の血を求める供犠的キリスト教の贖罪論は、結局は人間の暴力ではなくその血を求める神の暴力である。そして、イエスの受難を人類の贖罪のための供犠とみなしてきたことが、キリスト教の迫害者の性格を持ち続けてきた原因であるかもしれない。しかし、神は暴力を望まず供犠を好まないというジラルルがいくら主張しても、神自身の刑罰によるものや神の命令による他民族の殲滅などの殺戮は、旧約聖書の中ではあたかも日常茶飯事のように繰り返されているのである。護教論的に非暴力の神を主張しているが、旧約聖書で著わされている諸々の暴力的刑罰や命令が神からのものであるということは、避けられ得ない事実である。このような神が、人類の罪の贖罪として真に正しい神の子の血を望んだとしても矛盾は発生しないだろう。イエスが十字架において神に捧げられる最後の生贄として、受け入れられた後には生贄に科される暴力が止むのである。

イエスの受難が、脱供犠化を始動させたという概念には賛同できるが、それはイエスの死が人類最後の供犠であったとしての、供犠的儀礼の終焉を現すととらえても問題はないだろう。また、この贖罪論に絡む事項でジラルルは、イエスの受難とそれに続く模倣（ミメーシス）的欲望システムの解明の業が、神と人間の間を阻んでいた原罪で損なわれた契約を復活させると主張している。それを知ることによって何らかの変化が各個人に起こる可能性は否定しないとしても、キリスト教での聖化と呼べるような人格の変革のようなものが起こるとは到底考えられない。模倣（ミメーシス）的欲望によるシステムの解明によって、自らの欲望のシステムを認識することが、たとえできたとしても、その欲望からの解放が十全にあるとはとても信じられない。このシステム

が様々な文化や宗教および共同体に存在することは否定しないが、それを知ったとしても模倣のなす隷従から逃れることは容易ではないだろう。

ジラルールの意見に関する問題点を列挙したが、まだまだ十分ではないだろう。また、議論を尽くすべき点も多数残されている。彼の遺した業績が膨大だからという言い訳もできるだろう。先述したように、模倣（ミメシス）的欲望論を土台とした、暴力的社会システムの循環は個人のレベルにおいても共同体に関しても妥当性がある。問題点や疑問点はあるとしても、この理論は政治や社会、そして共同体などを考えていく上で幅広く応用することが可能である。既に、彼の理論を土台とした研究が、多方面で行われている。そういった意味において、ジラルールは膨大な業績だけではなく絶大な影響力を世に遺した偉大な研究者であった<sup>75)</sup>。

## 参考文献

- ジラルール, ルネ 1971『欲望の現象学—文学の虚偽と真実』古田幸男訳, 法政大学出版局。
- ジラルール, ルネ 1997『このようなことが起こり始めたら』小池健男訳, 法政大学出版局。
- ジラルール, ルネ 1982『暴力と聖なるもの』古田幸男訳, 法政大学出版局。
- ジラルール, ルネ 1984『世の初めから隠されていること』小池健男訳, 法政大学出版局。
- ジラルール, ルネ 1985『身代わりの山羊』富永茂樹訳, 法政大学出版局。
- ジラルール, ルネ 2008『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』岩切正一郎訳, 信教出版社。
- ジラルール, ルネ 2008『文化の起源—人類と十字架』田母神顯二郎訳, 法政大学出版局。
- 西永良成 2002『〈個人〉の行方—ルネ・ジラールと現代社会』, 大修館書店。

---

75) ルネ・ジラールは2015年11月、本論を執筆中に91年の生涯の幕を閉じた。

# A relationship between the mimetic theory and Christianity in the light of René Girard

Isao MATSUDAIRA

More than fifty years, René Girard has developed a hypothesis which is called the mimetic theory. According to this theory, human beings imitate each other, and this tendency spreads mutually among people and leads to rivalries. This mimetic also causes mutual conflicts in a community. Since the mimetic rivalry that develops from the struggle for the possession of objects is contagious, it leads to the threat of violence.

According to Girard, such conflicts are partially solved by a scapegoat mechanism, but ultimately, Christianity is the best appeasement to violence. Girard believes that the gospel texts have instead acted as a catalyst that brings about the break-down of the sacrificial order. The evangelical “good news” clearly affirms the innocence of the victim, thus becoming, by attacking ignorance, the germ of the destruction of the sacrificial order on which rests the equilibrium of societies. The Old Testament already shows several turning points, and also exposes the mythic accounts with regard to the innocence of the victims. The Hebrew people were conscious about the uniqueness of their religious tradition. The gospels fully clarify this hidden system, and unveil the Satanic order which has continued since ancient time. The gospels also describe the foundation of this order as the murder in the account of the Passion.

Medieval Europe showed the face of a sacrificial society that still knew very well how to despise and ignore its victims, nonetheless the efficacy of sacrificial violence has not decreased, in the measure that ignorance has receded. Girard sees the uniqueness and of the transformations of the Western society whose destiny today is one with that of human society as a whole.

The purpose of this paper is to research about the mimetic theory and the scapegoat mechanism, and to provide a deeper understanding about a relationship between those hypotheses. Through criticizing Girard's concepts, this paper will provide an accurate recognition concerning the redemption.